

平家物語圖會
前編
二

13
2693
2



2693
2

平家物語圖會卷之二

目錄

- 多田行綱返忠成親卿一身黨類被捕重盛公憐愍
多田行綱返忠成親卿一身黨類被捕重盛公憐愍
- 畷岳の大衆貫主を奪つて登山の圖
畷岳の大衆貫主を奪つて登山の圖
- 多田藏人行綱入道殿へ密謀と注進する圖
多田藏人行綱入道殿へ密謀と注進する圖
- 重盛公新大納言の命乞門脇教盛卿丹波少將の命乞
重盛公新大納言の命乞門脇教盛卿丹波少將の命乞
- 重盛公諫諍
重盛公諫諍
- 相國入道西光法師が頭を足下に踏踏圖
相國入道西光法師が頭を足下に踏踏圖
- 小松重盛公諸軍を召する圖
小松重盛公諸軍を召する圖
- 新大納言配所卒去藤藏人謀ゆる徳大寺殿丹波少將の命乞
新大納言配所卒去藤藏人謀ゆる徳大寺殿丹波少將の命乞



平家物語

平家物語圖會卷之二

康頼亭都婆と流と

源左衛門信俊大納言入道の御返直を北の方奉る圖

已上

平家物語圖會卷之二目錄終

平家物語圖會卷之二

東武 高井蘭山公翁述

三田行綱返忠成親卿一身黨類被捕捕重盛公憐愍

治承元年五月五日天台座主明雲大僧正公清を停止の上藏人を由使ゆく如雲輪の由本尊を召返す由持僧を改易せしむ。即使應の使を付く今度神輿内裏振奉す。衆徒の張本と召たり。加賀國小座主の由坊領あり國司師高のれを停廢の同其宿意依く大衆を語り。亦詔を致さる。由表已小朝家の大事ぬ及ぬ。西光法師父子が換奏依く。法皇大御疑難あり。殊小重科不行る。由とや明雲へ院の由氣色悪くけし。印鑰を返す。由座主を辞す。由より同十日鳥羽院七の宮。覺快法親王天台座主の成せり。是は青蓮院の大僧正行玄の由弟子に明る。十二日先座主所職と收せし。上檢非違使二人と

平家物語圖會卷之二

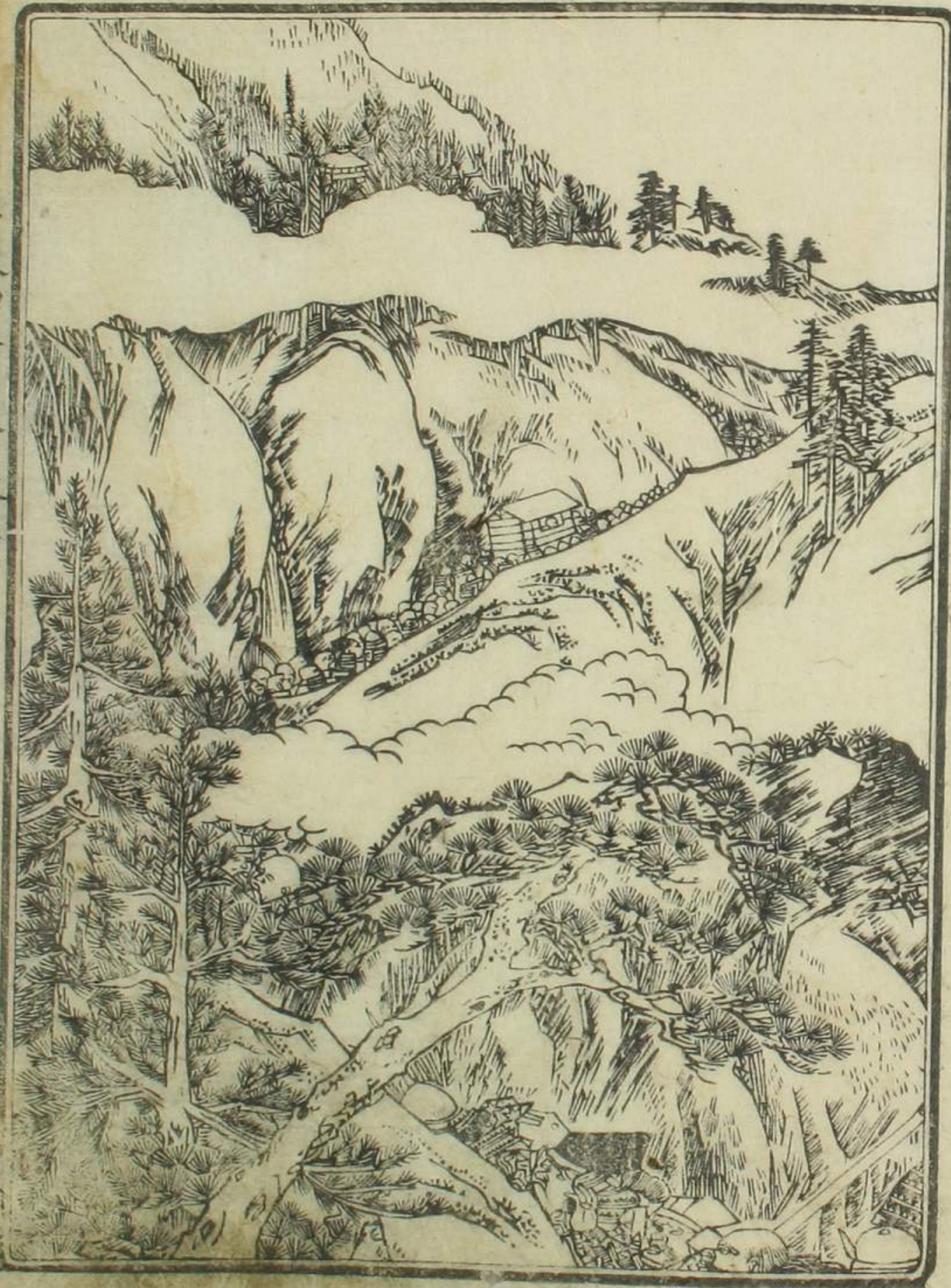
付く。井の蓋し火の水をうけく。水火の責小行ふ。死よりや。西に依く。大衆
猶希洛とて。安へけ。是。北京中。又。騷ざあり。同。十八日。太政大臣以下。の公卿。十二人
参内し。陣の座。小着。先の座主。罪科の議定あり。八條中納言。長方卿。い
ま。左大弁。宰相。ゆい。ま。れ。い。進出。や。さ。ま。ら。法家の勘状。不任。せ。死罪。二等。成
減。し。流罪。せ。ら。づ。い。ら。た。明雲。ハ。頭密。兼。え。し。浄行持律。の上。大衆。妙。經
を。公家。小。授。菩薩。淨戒。を。法皇。小。保。せ。なる。御經の師。御戒の師。を。重科。小。行
し。ん。も。憚。ら。ぬ。あ。ら。ん。還俗。遠流。を。宥。ら。る。當。れ。と。憚。り。可。あ。り。や。さ。る。く。ゆ。そ
當座の公卿。此。儀。同。せ。ら。る。然。る。不。法。皇。ハ。憤。深。く。遠流。小。決定。も。太。政。入。道
も。此。で。残。り。え。と。院。奉。せ。れ。ら。法。皇。ハ。風。氣。と。く。御。前。も。召。し。と。ぞ。本。意。を
罷。出。る。僧。を。罪。さ。る。習。と。く。度。縁。を。召。返。し。還俗。せ。め。大。納。言。太。輔。藤。井。の
松。枝。と。云。俗。名。を。付。ら。し。と。る。此。明。雲。と。す。村。上。天。皇。第。七。の。皇。子。具。平。親。王

六代の御裔。久我大納言。頭通卿。の。子。之。無。双。の。碩。德。天。下。第。一。の。高。僧。と。れ。は
君。も。臣。も。尊。と。り。天王寺六勝寺の別當。位。も。け。り。の。ゆ。え。と。も。陰。陽。頭
安倍泰親。と。せ。ら。ん。さ。さ。り。の。智。者。が。明。雲。と。名。乗。ら。ん。と。も。心。は。後。上。の。日。月
の。光。を。並。べ。下。り。雲。あり。と。難。し。と。る。仁安元年。二月。廿。日。天。台。の。座。主。も。る。也。
同。日。の。三。月。十。五。日。也。拜。堂。あり。中。堂。の。宝。藏。を。開。れ。た。爲。も。種。々。重。宝。其。中。の
方。一。尺。の。箱。の。白。布。も。く。裏。と。り。一。生。不。犯。の。座。主。彼。箱。を。開。く。と。は。黄
紙。に。書。る。文。二。卷。あり。傳。教。大。師。未。來。の。座。主。の。名。字。を。豫。と。注。置。と。り。
我。名。の。有。り。と。い。ふ。と。く。そ。と。り。奥。と。い。ふ。と。本。の。ど。く。卷。返。し。置。置。ゆ
習。ら。ば。左。に。そ。ち。か。り。け。え。か。る。貴。人。と。れ。た。先。世。の。宿。業。ハ。免。と。り。哀
ら。し。次第。同。北。日。配。巧。伊。豆。國。と。定。め。ら。る。人。と。さ。ら。ん。と。し。れ。け。と。も
西。光。法。師。が。換。奏。に。依。り。あ。ら。ん。行。と。る。今。日。都。の。内。を。追。へ。と。く

追立の官人白河の坊子行向く追する僧正位に出る粟田口の邊一切
經の別所へせりまを山門を注ぎて我々が敵の西光法師父子の
する者なりとて彼等父子が名字を書き根本中堂の十二神將の
内金毘羅大將の左の足の下に踏せ十二神將七千夜又時刻を同た
西光父子が命を召取り口と呪咀しける同九百一切經の別所より配所へ
起る多しとて大津の打出の濱も成ぬる文珠樓の軒端白くこえたる
を二目ともえ多ぐ袖を顔へ押當て涙も咽び多しとて山門より宿者碩
徳三十一とて澄憲法印其時へ未僧都もくおせり餘は名残を惜み
なり粟津追送進せ暇と亡く帰らんとせし僧正志の切なる感と年
来流心中秘せん一心三視の血脈相兼を授らる此法の釋尊の附囑波
羅奈國の馬鳴比丘南天竺の龍樹菩薩より次第に相傳へられたる今日

の情の授られたる流石末世と云ふ澄憲此附囑を清法衣の袂を
絞つ都へ歸り上らんと心の中こそ推量らる又山門より大衆起り食儀
さる中義真和尚以来天台座主始り五十五世に至る迄流罪の例をゆひ
ほしく業を延曆の比より皇帝へ帝都を建大師へ當山小攀上り四
明の教法を此所弘めゆひ一も以降五障の女人跡絶く二十の淨侶居を
占り嶺中を兼讀誦幸田く麓中七社の靈驗日新え彼月氏の灵山へ
王城の東北大聖の幽窟に此日城の獻岳帝都の鬼門の時く護國の灵
地入代々の賢王智臣此處の檀場を占未代のゆめも争う當山小瑕とて
登たつて此處を追く馳まるとん所より奪ひ取留めをまよと云ねる
雲霞の大衆山をまろく発向し我々の志賀唐崎の償略を歩と續き
あり又へ山田矢橋の湖上を船押すもの是をこくさうも緊いげり

正統物語卷之二



あぐ ざりゆんたの
巖 岳の大衆貫主を
うそ といえ
奪々 登山の圖

三才抄言圖會卷之三

追まの齎使而送使散く皆凶まぬ大衆因寺へ入り向ふ先座主あ何
 るごと宣ふふちるぐの沙汰あるより上へ大衆驚れ多し九勅勘の
 者も日月の光やふ當らむと承る況や時刻を廻らさば配所へ追下さる
 登りとの院宣宣旨より少も御伺へるべ大衆疾く歸上らるると端
 近くかく猶宣ふ我身犯せる科聊もあ無実の罪ゆく重科必此へ山上
 の兩所定く照噴しあらん然バ神佛の悪もあむの故と受バ神佛を
 も人を怨む所あり是と訪らひ入りあ衆徒の芳志へ忘るは
 期るごとく香深の御衣の袖を濡し受バ大衆も鎧の袖を浸さるぬに已
 む由興さしよき疾く召るしとトを先座主昔そ三千の衆徒の貫主より
 今ハ斯く勅勘流人の牙ゆく修学者達も昇捧らるべ死やと中く衆徒
 多し西塔の戒淨坊阿闍梨祐慶と云惡僧身の丈七尺あり黒皮

威の體大流目み金交るるを草摺長み着る胃ハ法師をみおせ白柄の
 雑刀杖み突大衆の中を押分く也前み奉り大の眼をみ瞋し先座主
 と普し眼其心あてくそくく目も合せひもく召るしとト先座主
 餘り怖し急ぎ乗る大衆取らるこの嬉しき歴くの修学者皆昇
 棒上るやどみ人へ晉と大祐慶ハ晉どきと峻き東坂平地を行かどくぬく
 終り大講堂の庭に昇居く再び僉淺さる様ハ貫首ハ首尾克奪し浦ぬ但し
 勅勘遠流の方と貫首み用ひやせん如何あんと時祐慶又進み出先
 座主ハ勅勘遠流せしむ罪を智惠高貴あり三千の衆徒の貫首
 徳行深重し山和尚より此より我ハ頭寄の主と失く数輩の学
 侶永く堂雪の勤を怠んて心憂る也祐慶張本み給られ禁獄流罪
 着の首を刎らるも今生の面目冥途の心あると涙をうぐを大

衆皆むと同日先座主を東塔の南谷妙光坊に入奉りぬ時の横火の権化
の人も免ざり例の昔唐の一行阿闍梨の大徳ゆへに玄宗皇帝の御持僧
なりしうごも玄宗の妃揚貴妃の名と立其疑あり果羅國へ流されし其
道人跡絶江浦の前途迷ひ深山に夜猿悲む無実の大犯の人と唱へらば
のぬき衣曝めぬを天道憐れむや九曜の象現し阿闍梨を護りて流
狼豹戮の難もあがり一行をうろ指と食断其血あり左の股に九曜の形
を写されし和漢兩朝密宗の本尊なる九曜の曼陀羅とす是れ去程に
山門の大衆先座主取留めたりして法皇陛下に安んじ給ふに
々々如く西光法師や々々昔より山門の大衆我修るる傲流今も肇ど
中ぬが今度の外遇かみいもくぬけひい等雨の内沙汰あり此後
世の世あもいすと唯今我身亡び失んもあらず井吉を震ひ宸襟と惱

奉る。叢蘭茂うらんとこれ秋の風を破り。王者明らるるんとこれ
詭計これと圖ととら宜るる。新大納言成親卿以下近習の人々仰く
法皇山攻せしむべしとや。山門の大衆はさるる王地を好む。詔命を對
捍せんも恐とんと。内院宣を隨ひて。衆徒もあつて。先座
主へ東塔の南谷妙光坊かへりける。大衆二心ありとや。又のるる憂
目よりあふんと。こころか細くぞのこころを。されば流罪の沙汰は
アタリ。又新大納言の山門の騷動あり。私の宿意とて皆く押へらるるも
内義支度へさぐるり。こころも義勢のさめ。此謀叛叶へしともさるり
し。右の片腕か思ふ。三田藏人行綱所詮此の無益とて心付可袋
の料を贈らば。布衣の直垂帷子に裁縫せ家子郎ホカ。さるる目瞬く
居りける。情平家繁昌のさるると。當時容易傾けが。是れ夏

平家物語

渡ぬる程さぶ。行綱も失せらるる。他より漏れぬら。返り忠しく命を
保んぬると同廿九日の夜深。入道殿西八條の亭に奉り。行綱もそこへ来て
推泰いと業内を通らるれば。入道殿常も多しぬ者の何るぞ。次第兼て
主馬判官盛國を呼ばせり。全く人傳り申敷るんと云々。入道殿さぶ
とく自ら中門の廊下ゆれ。夜に遠隔ぬらん何ぞと宣へ。昼に人目撃く夜
に紛れ多く奉り。此程院中の人。兵具を調へ軍を催さるるを何ぞ申す。召し
かん入道殿の。法皇の山を攻めん。結構とこそ。事もろげ。宣ひ
け。行綱直り寄。小声成り。其儀もいへ。一向當家の山上とこそ。入り
入道殿さく。それを法皇も知し。召し。子細も及びぬ。執事の別當成親
卿の軍兵催されし。院宣とて。召し。康頼俊寛西光も腹心ゆく。
其外准か。合意ある。この條も指さる。云散。我身の暇中とて。出され。

其時入道大聲に侍を呼言。あつと。行綱愁ある。申證入る。
引とんと怖く。人も追ぬ。取袴。大野の火を放らる。公地に門外へぞ
逃出る。其夜入道殿筑後守貞能を召す。當家を傾んとする。謀叛人
み満。急がし。門も觸せ。侍を催せ。宣ふ。馳回す。披露を右
大将宗盛公。二位中将知盛卿。頭中将重衡。左馬頭行盛以下。一門の人。甲冑
已前を帯。指渡。其外侍。雲霞の。馳集。其夜の内。西八條
の亭。六七十騎も寄。翌六月朔日。聞。入
安倍資成を召す。院の御所へ。大膳大夫信成を呼出。急度。一
新大納言成親以下。近習の人。此門を。天下を乱る。謀叛の企あり。
一。搦捕尋ね。沙汰仕。それを。君も知。右。色と。先。宣
ひ。資成。院の御所。馳。信成を。此。色と。先。

平家物語卷之二十一

御前へ奏聞す。法皇嗚呼する是ら内謀のれを憂ふことこそ何ぞ
と仰し。分明の心返るものあり。資成急ぎ走歸り此より申せば
入道殿は。行綱八実を中へ。果告知せざる。浄海安穩なるべし
と。筑後守貞能。飛彈守景家と召く。當家を傾んと。輩一召捕
と下知せし。よろしく二百騎三百騎。あがりし。押寄く。捕入道殿先雜式
以て。中卿門鳥丸の新大納言。や合と。なるもの早く参り。更と下送られん。が
身の上と露あ。法皇山攻の心結構と。有ん。このころ。憤深ける
と。いもの。けの。と。情ける。布衣と。着る。鮮る。車に乗侍。四
人召具。雑色牛飼。常より。猶引信。西八條近う。く。人
四五町。軍兵充満。あ。畏。何。胸。車。下。門。入。更
内。ゆ。兵。た。る。も。く。並居。中。門。の。口。ゆ。恐。る。者。九。數。待。受。大

納言を取。引張。戒む。く。や。け。は。入道殿。中より。出。し。ゆ。ひ。と。あ。る
もう。と。宣。ふ。ゆ。侍。十四。五人。前後。左右。立。圍。大納言の。み。を。く。縁。の上。引
上。間。を。あ。の。押。籠。り。大納言の。夢。の。心。地。く。物。を。も。え。多。供。の。侍。大勢
み。隔。ら。と。雑。色。牛。飼。色。と。失。ひ。牛。車。を。捨。と。散。く。皆。逃。去。ぬ。近。江。中。將。入。道。蓮。淨
法勝寺の。執行。俊。寛。僧。都。山城。守。基。兼。式。部。太。輔。正。綱。平。判。官。康。頼。宗。判。官
信。房。新。平。判。官。資。行。も。囚。と。く。こ。そ。出。来。ま。り。西。光。法師。此。より。我。身。の
上。と。ひ。く。鞭。を。打。と。急。ぎ。院。の。御。所。参。り。六。波。羅。の。兵。も。道。ゆ。く。行。あ。ひ
西。八。條。殿。より。召。さ。る。急。度。急。と。云。け。は。奏。ま。る。院。の。御。所。参。り
ち。り。頓。と。糸。ら。め。と。云。け。は。悪。き。法師。め。何。更。と。り。奏。す。と。く。馬。より。取。く
引。落。し。中。の。縛。と。西。八。條。殿。へ。提。参。る。肇。り。根。元。与。力。の。者。ら。れ。ば。珠。の。取。り
戒。と。御。坪。の。内。引。居。り。入。道。相。國。大。床。の。立。と。碯。と。白。眼。當。家。を。傾。んと

まる謀叛の奴がられる姿よりちあら引寄とて縁際へ引付物展き天
 窓より顔をむづく踏碓固くはは下鷹の果を君召仕せぬ分外の
 官職を給父子は過當の舉動まるといふ誤らど天台の座主と流罪
 中を行ひ刺當家を傾んとまら謀叛の輩と与まるとか始終のま中
 登し陳せ水火の責小骨身を挫まると声あつらふ宣ひたる西光元
 來勝とて大剛の者ゆく色をも愛まるといふ氣色も居直下
 と莞余と笑ひ院中近く召仕る身執事の別當成親卿軍兵を催され
 る与せはととやぶる身同心聊も相違り但し耳の當ることを仰る
 るも他人の前ゆへ免れは西光分ゆへ左様のことを宣ふす抑也
 邊へ故刑部卿忠盛の嫡子ゆく十四五迄の出仕も故中御門藤中納言家
 成卿の辺ゆへを京童部へ高平太とてそや然る保延の比海賊の

張本三千餘人捕進せし賞とて四位の玄衛佐とて皆入る分と中
 へ忠盛殿上の交え嫌と一人の子とて今太政大臣を成揚つるも
 分外といふ法外とてえ本より侍の受領檢非違使に至る先規類
 例さぬ非む何たる分とて死向後暗口を利とて身あると憚る処る十
 分恥しめけは相困入道殿餘の腹を居難く替へ物もやされ良くて
 奴めが頭へ左右ち切る能く礼向を加へ其後何原へ引かし身首せると宣ふ
 松浦太郎重俊承りも足と挟まると痛向ふ西光とて争ふ拷問とま
 緊く白状の次第四五枚に記し其後口を裂とて口を裂と五條西の朱
 雀ゆき終り首を刎られり嫡子加賀守師高尾張の井戸田ゆ流され居
 りるを同國の住人小胡麻の郡司維季小仰と討せ次男近藤判官師經獄
 へ引かし誅し其弟左衛門尉師平と郎等三人をも首を刎れり是ら



奉^た相^{さう}國^{こく}入^に道^{どう}怒^どと
 新^{しん}大^{だい}納^{なつ}言^{ごん}を^を苦^く痛^う
 せむ^の圖^ず

平家物語繪巻卷之三

云かひるは者の秀と立障るまはれたこと綺過る天台の座主と流罪や此
 果報や整々山王善遊大師の神四封冥符立地小家くうる憂目小遇けるや
 重盛公新大納言の命乞門脇教盛卿丹波少將の命乞重盛公諫諍
 新大納言二間小推量は是日來の荒増洩せさるる人推し偏ぬらん
 北面の葦の中ぬもみらんるど業ト續け坐ける処小後より足音高らうか
 突けは我命失んぞ。武士共の泰るやと思の外入道殿板敷荒く踏鳴障
 子を颯と引明けゆらん。素絹の衣の短ま白た大口踏披き聖柄の刀推窺
 以の外怒る氣色ゆく大納言を瞥し後めつを抑由平治ま珠とたを内府が
 牙の替くす請首と進し人覺も忘れられや然るも何の恨ゆく當家と亡え
 とせしや恩をも知らぬと畜生とすそ當家の運命竭き人此処小趣へ
 うり日來の世増た直承んと宣ふ大納言全くさうてふ人への諫言ゆく

ぞいり能くも尋火と入道殿言せも果ぞ人やあると百とたれば負能くと
 泰のころ西光めが白杖取と泰ととあは是れはとさう出は入道殿是を取
 と推返しく二三返高々く讀やせ此上何と陳せらとんとあはは大納言泥
 のとくゆく物をもちゆささく居られぬあは悪やとと書面と大納言の顔小
 さとと投掛障子を踏と引盪と退しうが猶腹小居兼短遠兼康と百多難
 波次郎瀬尾太郎泰のけははあ男と庭へ引落せと宣へ是は左右るる
 もいなる小松殿の氣色ゆいんとやなる入道殿弥怒汝寺内府が
 命を重んと我が所輕んまよか此上と力及と宣ふあはあううとんと
 多ひえ立より大納言の左右のちを取庭へ引落しをりたる其時入道心地上げ
 小取く卧喚各よと宣ふ二人の者共大納言の左右の耳小口をあく私語引取
 けは二声三声苦しけ喚られ其躰阿防羅利罪人を呵責する冥

途の形勢是ゆらぎとせしむ。新大納言ハ我身くなるふつけくも子息丹
波少将成經以下推さ者凡ゆるる憂目ゆる逢らん多し中も覺束さく
さむり執つた六月小袋束も窺らんとせ熱さも堪ぐけは六月宵もせ死する公地
けは推をくくやべし其覺給を小松大臣例の善悪雖もな方なれば遠
日けく後嫡子権亮少将維盛と車の後に乗せ備府四五人隨身三人召
具くと軍兵一人も具せられむ大様氣ゆくと坐れば八道殿をとり二門の人々
皆おぼけぬぞえぬ大臣中門ゆく車より下ゆふ所へ負能つと奉くるを是
ほのぬ大なる軍兵人も召具せられぬ中々とやると大臣殿大事と
天下のうとこそいふその私事を大ると云ふやあると宣ひ兵杖を帯
りける兵共唯口を閉くする其後大納言ハ何國置とやと此彼引あけ

つらふふある障子のうちと珠の結る処あり。ちやらんとて用けれれば
大納言の涙は咽びう伏す。目も又奉るはいつあやと宣ひ其時足
著さる嬉しげなまをさる。地獄の罪人が地蔵菩薩と見えんもか
やとて哀えさくやとて何事いふん今朝よりくる夏め逢い平
治も御恩とて頭を懸け上か位官昇進し歳四十餘りい恩生
世報し聲しうと何事此度こそも憐愍の救ひ下さらんあま
佛門ふ入ゆる片山里も籠一筋な後世の管はんとやと大臣殿さる
とて命失ひける追の工もよもいれ。縦ひ左に其重盛の命め代り
心易うとてや。父禪門の座前坐しあの大納言失せん能くも良慮
いぬ。其の先祖父修理大夫頭季白何院に召はれり以来家例な
死大官を経上り刺當時君無双の最惜れ。唯都の外へ出されば事

平家物語卷之三

倚よいてん北野天神きたのあまのかみへ時平ときひらの諛うそ奏うめ憂名うれなを西海さいかいの波なみ流ながる。西宮大臣さいみやうだいじんハ
夏田満仲なつたみちなかの諛言うそごゆく。恨うらみを山陽さんやうの雲うみよよと各無実おのづからする。是こゝも是こゝも
延喜えんぎの聖代せいだい安和あんなの御門ごもんの御み僻ひがりとも中なかつ侍しやくへいぞ上古じやうこ猶なほかくの事こと。況いはや
未代みだいみかたるる賢王けんわうも也なり。未み代だいみかたるる賢王けんわうも也なり。未み代だいみかたるる賢王けんわうも也なり。未み代だいみかたるる賢王けんわうも也なり。
急いそぎ失あはれど何なにう恐おそれとて刑けいの疑うたがひに短みづかくせ。功こうの疑うたがひに重おもくせ
よこそそん之これ重盛じゆうせい彼か大納言だいなごんの妹いもうと相あ具い。維盛いせい又また塔たへかす親おや。
成なりゆバヤと名な召めゆるん一向いひやう其その美みゆいなる唯ただ國くにの為ための家のいへの事こと。
中なかついとせ故少納言こすなごん入道にうだう信西しんせいが執權しやくけんの時とき我朝わがみくにめら嵯峨さあが皇帝てんていの朝あそ右みぎを
衛督ゑとく藤原ふじわら仲成なかつなりと誅つゐせられより以来いらい保元へんげん追君おひきみ二十五代にじふごだいの同行どうぎやうとぞ
死し罪つみと始はり取行とひ守治しゆぢの悪あく左府さふの死骸しがいを掘起ほりおこし実換じつかんせられ
るる。餘あまり居いる政まつりと存ぞんじされ古ふるの人の言ことの死罪しつみと行なる海内かい内謀ぼう

叛かへの華絶けつとて此詞このことばを存ぞんじられ平治へいぢの又また世乱よこしまと信西しんせいが埋うりてと掘ほ
發はし首くびを刎きて大路だいぢうを渡わたされい保元へんげんの行なりて我わがちとぞ。や身みの上うへ
小報せうほうとゆめとと怖おそれは是こゝは是こゝは是こゝ。朝敵あそゆめいを。くもく恐おそれあるべし
の采花さいかのころ所ところなけしと思おもはるる。こあるまどたれた子こ孫そんとぞ。敏み采さい昌ちやう
あふまや。存ぞんじ父祖ふその善惡ぜんあくは必かならず子孫こそんの及およぶ。經書きやうしよ小明白せうめいの及およぶ
りつも今夜こんや首くびを刎きらんとんこと然しかるべし。覺おぼえいと理ことわりを尽つくし中なかつされれば
入道にうだう殿どのも実じつも名なを死し刑けいへさし止とどけり。其その後あと大臣だいじん殿どの中門なかつかどの事ことは
みことと仰おほわれば。あの大納言だいなごんを失あはれど。へ道みち殿どの腹立はらたての事ことは
物騒ものさわり。いふは後あと必かならず悔くみ。僻ひがりと仕つかへ我われを恨にくむ。宜よろし兵杖へいじやくを
帯おひ。兵へい杖じやくも皆みな恐おそれ。領堂りやうだうに。叔おやぢも今朝けさ豆ま豆ま兼康けんかうがあの大
納言だいなごん小情せうじやうち。當ある奉ほうず。返かへりも奇怪きがい入いる。重盛じゆうせい帰かへり。ゆえに。二ふた所ところを

平家物語卷之三

三

三多言置在来三
憚らざりし。片田舎の侍へ皆かゝるぞと宜し。兩人甚恐入ぬ大臣殿加様心を
配し。小松殿帰られり。扱又大納言の侍は烏丸の宿所へ歸り。まづ
と申けし。北方より女房達声く喚叫ひひたり。少将殿下め推せ
皆取らん。急死何方も忍ませぬと申す。北の方今晨程
成り。残る身とくも安穩ゆく何せん唯同一夜の露も消え
そ本意あれ。今朝を限と知らざりし。悲しきと引ひてぞ臥せし。已
武士共進づく。一歩かくと耻ぢまう。方見目をまんも流石なれ。と
と。十ふ成ぬ女子。八歳の男子。三車小取来り。何地をさてもなく。かき
さく。もろろ。ねハ大官と上。北山。雲林院。ぞ坐る。其辺の僧坊
か下。壺や。送の者。身の捨。暇や。帰。今。幼
人。残り。残居。又。夏。間。人。も。ち。座。る。北。の。方。心。の。中。推。量。ら。れ。と

哀し暮行影をいふ。ふつひくも大納言の露の命。此夕限あり。と。以
たる。ゆも。消ぬ。宿所。女房侍。三。り。くれ。物。を。取。ま。め。夜
門。を。推。も。と。殿。馬。共。立。立。れ。草。飼。め。入。も。ち。夜
あ。れ。馬。車。門。立。宿。客。座。小。列。と。遊。戯。と。舞。躍。世。と。一。の。近
き。傍。の。者。か。物。を。高。く。怖。恐。昨。日。か。も。あり。を。夜。の。間。香。ら
形。勢。盛。者。必。衰。の。理。目。の。前。こ。頭。と。れ。無。尽。と。哀。ま。と。書。と。江
相。公。の。筆。の。跡。今。ぞ。ひ。ま。れ。け。丹。波。少。将。成。経。其。夜。法。皇。の。御。所。は
住。寺。殿。小。上。臥。未。だ。れ。ざ。り。け。大。納。言。の。侍。急。ぎ。に。野。小。馳。茶
少。将。殿。を。呼。出。此。より。ま。れ。程。の。と。ち。宰相。の。許。り。知。せ。ま。ん
と。宣。ひ。も。と。ぬ。宰相。殿。より。と。く。使。あり。宰相。と。相。國。入。道。の。第。六。波。羅。の。後。門。の
必。ね。何。の。ゆ。ゆ。今。朝。西。八。條。の。亭。より。急。度。具。一。急。と。下。越。と

三多言置在来三

云遣されれば少將此より心ゆく近習の女房達を呼出し夜更何とぞ身
 物騒しうひいを例の山法師の下るふゆと餘所ふひくはげと身
 の上み成ると夕去大納言斬るづいられ成経也も同罪ゆかえ今一
 度出前へ来り君を拜し度とぞもくる身と成と悼み存いと下され
 女房達急死此旨奏問せし法皇ゆ今朝禪門より使ゆかえ心
 ぬらそとゆ疾くと仰ふ依と少將御前へ来り法皇仰下と旨
 もなく唯唯涙を押し多ふ少將又疾小咽と上ん詞ち良み少將
 罷出され返を遙出覽し返り是限ゆく又出覽さる期へみまじく
 召出声を立ち歎き多る直ふ少將退出られ院中の人局の女房
 達名残を惜袖を濡さぬ方もなく舅宰相の許へされ北の方
 へ近う産ま死人ゆく出座けるが今朝より此歎さふ打添日命も

消入心地ぞせられけり少將御所を罷られより涙尽せぬ今又北の
 方のみ松をこもひいとせん方ちがみえられぬ少將の乳母六條と云女
 あり我乳母糸君と血の中より懐揚むとてまゐらせ以来月日の
 重なるに従ひ年の積る歎き偏み君の成人しとせせり人となれ
 悦び白地と多むとも今年二十二年片時も離れなむ院内へ事せ置
 罷出ると心苦しく今いづる憂めあ合せもいと位沈むと
 少將有め嫌しく宰相殿召され命をうりて積るる人の成さる
 歎きこれと慰めるとも六條へ目も厭ははらへたり時小出八條殿
 より使敷並ちれば宰相今出向と左も右も成めと少將を車に乗
 乗とゆられり保元平治以来平家の面へ衆衆愁歎ちりよこの
 宰相と誓由めり歎きあひまひ六波羅近くをれ少將へ門内へ

用の旨断らるる間其邊ある侍の待小降置宰相より通れけり
 少将ハ武士共四方を取圍む緊密守護を宰相中門内居ひしが
 入道殿も逢はせり源大夫判官季貞を以て之を以て教盛由ら
 き者小親しく成る返さくも悔はむもいづれ相具し者此ほど
 惱ていざ今朝より此歎を打添へ命も既絶ひしを教盛うとて
 僻事さきり少将ハ暫く教盛を預け下されりと季貞此より中へ
 道殿良宰相が例の物小公のぬよそく頃小返辞もする良みくやそん
 新大納言成親以下近習の面々此門を閉ざりて天下を乱る企あり少
 将ハ既小成親の嫡子さきさやの此謀叛を遂んぬら返さくも標さ
 小婿婿の好身ありとて預けきと命やとせとて百を季貞宰相
 殿へ述べせよと本意をげゆく重ねくやこれら保元以降度々の合

戦も命小代人と存せし度も入道殿も知し百を了らん此後と
 ても荒さ風を先防さすらんこも教盛よそ年若くは若き子共
 餘りや一方の此堅小ちくくばやそれ小替く少将を預らん小弟救
 るやと一向教盛貳者と云ふも小こそ左まぐ審察されば世小みく何
 せん身の暇もく出家入道一高野粉何ゆも籠いん由るは侍世の交
 へ世小あれば望もむ望叶はれ怨もあれや世と厭ひ真の道入んり
 るは見えいと宜ひたる季貞又は前小出宰相殿を以て百切くえと
 るるべんとやまぞ入道殿出家と迫りけり其後より少将を暫く
 出辺預るとやべしと宜ふ此音又やこれ人の子へ持たれとく我
 子の縁小結締むかく心を推ドとてこれぬ少将侍清いといらんや
 時へ道殿餘り小腹立と對面もする出辺の刃を放しも叶はずと頃小宜ふ

ま。出家へ道と返す上。然るに預ると宣へた始終吾も一た是れ
 と申す。少将さへに恩を以て誓いの命に延びぬこそ父大納言ごへ
 何とぞや。百といや。宰相の辺のての慟ゆられ。それさへもいふと。其
 時少将涙とまろくと流し。命惜き父を今こびえなるといふ。去
 大納言斬とんず。成程命生く何せん。只一知のうも成中。やと給せ
 いとくと悲歎とくれ。宰相世も苦い。けふ不知の辺のこを種とせ。れ
 其儀や。かん躰ふあふ。但し今朝内の大臣色く。させれば。それも皆
 へ能松ふ安つると宜ふ。少将安もあふ。泣くを合せ。恨とくる。子小
 あとぞ。誰う。今身の上を指置。かく追憶ぶ。其の契へ親子の同小
 ぞある。子を人の持つ。死のうと。いひ返され。夫より又同車。く
 帰ら。とられ。宿所あ。女房侍。湊死。る人の。懸。る。いひ。て。悦。び

泣とせられ。る。太政入道。此上も心行。む。と。赤地の錦の直垂。小黒
 系威の腹巻。白金物打。胸板せめ。先年安藝守。うり。時神拜の次
 小灵夢を蒙。最島大明神。り。現。給。銀の蛭巻。く。小長。常
 小枕を放。と。立。られ。を。掖。中。門。の。廊。小。出。負。能。と。石。筑。後。守。負。能。ハ。木
 蘭地の直垂。小緋威の禮。象。と。也。前。小。畏。る。つ。小。負。能。保。元。小。平。右。馬。助。と
 始。一。門。半。ぬ。る。と。新。院。德。院。の。也。の。味。方。小。系。の。の。官。ハ。故。刑。部。卿。盛。情
 公の父。の。養。君。ゆ。と。坐。し。る。傍。に。教。へ。難。る。を。故。院。の。也。送。誠
 小任せ。御方。ゆ。と。先。を。掛。り。是。の。奉。公。次。小。平。治。元。年。十。二。月。信。頼。義
 朝。が。謀。叛。の。時。院。内。を。取。奉。り。大。内。小。権。籠。り。天。下。闇。と。成。り。し。ゆ。も
 身。を。捨。と。凶。徒。と。追。落。し。經。宗。惟。方。を。召。禁。る。小。至。と。申。す。君。の。也。小
 命。失。た。と。せ。し。と。毎。度。然。バ。人。ハ。何。と。申。す。争。う。此。二。門。ハ。七。代。追。と



巨家物語會卷之三



巨家物語會卷之三

相國入道西光法師
頭を足下ぬ
踏躑圖



必召捨らるべし。それ成親と云無用の徒者。西光と下。下賤の不當
人。ガヤるふ附せぬ。動されば此門を滅さるべし。此結構こそ奇し。此
此後も諺奏する者あり。當家追討の院宣と下されん。必定せり。朝
敵と成る悔るは益あり。暫く世の静らん程法皇と。鳥羽の北殿へ移
一。森とさる。これへ希有御幸と。やまんと。多のいふ其儀あり。北
北面の者たが中より。箭一筋も射んと。多。用意せよと侍たへ觸知せよ。
入道院方の奉公多。切ぬ馬。鞍置せ。著背取来と。と宣ひ。主
主馬判官盛。急ぎ小松殿へ馳。参世へ。斯いと告ぐ。大。大臣殿
も敢む。嗚呼。成親の首。刎られ。と宣ひ。其儀。ゆ。侍共
追打立。院の御所。法住寺。殿へ押寄。取。御幸。と。宣ひ。侍共
と。内実。鎮西の方へ流。と。擬せ。れ。と。大臣。殿。何。也。唯。今。と。

中。と。い。え。と。い。れ。今。朝。禪。門。の。物。狂。の。氣。さ。り。へ。の。と。い。て
ゆ。と。と。急。ぎ。車。を。飛。せ。西。八。條。殿。へ。到。り。門。へ。入。り。入。道。殿。腹。巻。を。着
玉。一。門。の。卿。相。數。十。輩。各。色。の。直。垂。ふ。ひ。く。禮。多。中。門。の。廊。下。二。行。へ
着。せ。其。外。諸。國。の。受。領。衛。府。諸。士。縁。居。益。と。庭。も。ひ。と。並。居。さ
旗。竿。せ。川。を。め。馬。の。腹。帶。を。穿。め。兜。の。緒。を。縮。今。も。打。立。ん。氣。色。さ。り
小。松。殿。烏。帽子。直。衣。大。紋。の。奴。袴。の。を。取。悠。然。と。入。り。外
事。の。外。も。さ。り。入。道。へ。目。成。く。例。の。内。府。が。振。舞。よ。ね。大。折。檻
せ。と。い。れ。流。石。子。な。り。内。五。戒。を。保。ち。惡。惡。と。言。と。外
の。五。常。と。乱。む。と。あ。禮。正。人。ち。れ。其。姿。小。腹。巻。と。對。ん。と。取。り。や
と。と。障。子。少。り。立。腹。卷。の。上。素。絹。の。衣。と。周。章。多。着。ゆ。い。が
胸。板。の。金。物。少。り。加。へ。と。藏。え。と。頻。衣。の。胸。を。引。遠。く。そ。ゆ。ひ。る。

大臣殿へ宗盛公の座上ふ多れ。父子互ふ何も言ぐえ合され。入道殿やうらふ成親の謀叛はるの數ふは一向法皇の也結構ふ。ぞや皆く世を辭んやと法皇を六鳥羽の北殿へ移し奉りする。是へ希御幸を成まらせんと扱わく支度不及と大臣殿やもあへむ。位はらへ道殿さく如何やと忙然多へ大臣殿涙を押し仰素り。他運へたる未不成ぬとまへ人運命の傾んとて思ふ。又此形勢をこゝろす。更不現とも覺いた。我朝へ天照太神の由子孫國の主とて天兒屋根尊の清未朝の政を司せむ。太政大臣の官小至人甲冑を禮入と禮候不背き。弓箭刀鎗を第一。破戒之慚の罪を招き外仁義礼智信不背り。恐あるや条ある。

心の底小旨趣を疎まぶ。世小四恩ある。天地の恩。父母の恩。衆生の恩。其中小最朝恩重。普天の下土地小あぶる。ゆは頼川小耳を洗ひ首陽山小嶺を折。殊庭古の賢人も勅命そむ。無支愚暗の身ぬ。蓮府槐門の位小至り。加支國と郡と半二門の河領と成る。田園悉く一家の進止。是希代の朝恩小い。太の自王恩を忘るひ。猥小法皇を傾け。天照太神正八幡の神慮。みも背せし。但一父の思召立る。処道理半無。此二門代朝敵を平げ。四海の逆浪を静し。無双の忠者れ。其賞小俵ら。彼を是。我を。我を是。彼を非。是非の理誰う能定む。相小賢愚入環の。

如くみしと端ちの爰を以て縦ひ人怒ると云ふも却て我外を懼しと云
 とい然れ當家の運命未だ盡ざるに依りて謀叛已に顯れしにぬ其上仰
 合さるる成親を召置り上へこと君の思ふに思はずと召立りて何
 の怖れに所當の罪科行とぬる上へ退くるの由を陳し上させぬの君
 の由ありぬ弥奉公の忠勤と云され民の為に益撫育の良憐を施しと
 あり。神明の如護ふ預り。佛陀の眞慮も協へ。君も必召直まといへし
 君と臣と瓜比るに親疎別方なり。道理と僻事とを双べん争う道理
 小付ざる所死。此度へ尤君の由理と存る旨も之に叶はんと近も院中を
 守護し兼せしむ。其故へ重盛を止め叙爵より今大官を昇るやむく
 君の由思ふありざるにぬ。此恩の重きを以て之に千顆万顆の珠も超其
 恩の深きを以て之に一人再入の紅ぬもるにぬ。此皇恩を一命ゆく償ひぬ。

其儀小至らば重盛が才代に命代人と契し侍を少といひぬ。
 是ら引具し法住寺殿を守護致さば流石以外の外に大事小いひるん
 悲しむ君へ存公の忠と致んとまれば。換迷盧八萬の頂より高き父の
 恩を立地不忘と過し保元左典殿義朝其父六条廷尉為義を誅し
 する。先規を踏ふ似たり。痛しむ不孝の罪を遁んとまれば君も不忠
 の逆臣とあり。青史を未代に汚し進退已に究ぬ。是非今更に辨
 かご。控むる処唯重盛が頭を召立りて。然る院中の守護も仕むる院
 泰の由供も仕むる異國の蕭何の功傍も越えられ。漢高の太相も至る。劔
 と帯し皆を履ちる。殿上へ昇るに公許されしも。慮慮小并とありし
 へ。高祖重く敬言深く罪せられし。前漢書も顯然に此先蹤を以ては
 富貴と榮花と重職と朝恩と相兼く。穴丸の運の聲んて難くべし。

小市くは富貴の家ゆゑ禄位重疊し再実るる樹へ其根必傷とト
 甘ん心細くよそいへり追う命生く乱ん世をもえん唯未代み生を票と
 かる憂目小逢い重盛が果報の程こそ拙ういへ唯今も侍一人小仰付ら
 じ。御壺の内へ引出され重盛が首と勿らんへいと易き程のあつみいめ
 とそ。直衣の袖を涙小浸る。うた口挽き一列の方と皆袖を濕されたる
 入道殿頼切たる内府へさう宣ふ世も哀げぬ。さうそれとのま
 とへ寄いさ。悪黨共やと小君の附せぬ。又もいさるる僻事ちと出
 来んうとさふをうりふいと宣ふ大臣殿縦ひのさる僻事出来いと。君を
 何とう仕ゆふべ死さう。つひ立ち中門小出侍たふ宣ひける。唯今是ふい
 くやつる夏茂とさ。汝ら能承む。今朝よりさうの工たや。静んと春和
 在られ。混騒ふさつる間先帰つる院茶の出供小於る。重盛が首の

刻られ。とんとと仕とさ。は人。とと。小松殿へ帰られ。其
 後主馬判官盛国を召く。重盛こそ今朝別。と天下の大事を
 かくり。我と我と。思ん者。物具。と急。と催。と宣。と地。と
 と披露。とさ。うけぬ。強。ぬ。人。のか。中。う。披露。あ。う。の。城。別
 の子細。とんと。我。と。と。馳。と。桂。小。淀。羽。東。瀬。宇。治。岡。屋。日。野
 勸。修。寺。醍。醐。小。栗。栖。梅。津。桂。大。原。志。津。原。并。生。の。里。小。湯。居。兵。代
 戎。の。禮。と。と。い。や。と。胃。を。着。ぬ。も。あり。あ。る。ひ。と。夫。履。と。と。未。と。と。日。と。持。ぬ
 も。あり。片。笠。踏。や。踏。さ。と。小。周。章。騷。と。馳。系。と。と。小。松。殿。の。騷。と
 あり。と。や。之。と。西。八。條。小。数。千。騎。あり。ける。兵。代。入。道。殿。の。右。と。も。や。さ。と
 ぞ。め。れ。つ。と。皆。小。松。殿。へ。馳。と。程。小。弓。矢。前。小。推。乃。程。の。者。一。人。も。残。ら。ば。筑
 後。守。貞。能。唯。一。人。い。ひ。さ。る。を。召。く。内。府。へ。何。と。思。ひ。く。是。ら。を。皆。か。く。ま。ふ

呼取やうん今朝是ゆく云る程の浄海が許へ討ひも向ふやと宣へ
 負能涙とらふ人も人あそよめ争う唯今さるゆりのいぢき
 今朝の此事は早皆の後悔ぞいふとやうるが入道殿もく内府の
 中違へて世の人の思ひ付もあく却て一家強乱せんこと恐るまひ
 天皇と迎ふも人の心も和ぎ急は腹巻を脱素絹の衣の袷袋
 打掛く心めも起ぬ念誦とこそ坐るも借も小松殿の盛園あつて
 急列付るが馳参る侍矢庭の一万余騎ぞはしる着到披見の後
 大臣殿中門のゆく侍せふ宜らる日來の契約を違はせ早速の参差
 神妙に今朝別々天下の大事と安させ故召つるもされども此事
 安直しつるが僻事めくありし然る上疾く歸る自今以後を
 召てあぶかくの通り速く弛緩ふ置しと各歸されたり余とせり

用ひるりしつるも今朝又と諫しとて詞を隨く我身も勢の付り
 付ざるの程をぞ知又父子軍をせんともあはれ林茂入道殿謀叛
 の心も柔だるふこの謀ありし入道殿かく速く勢の集り公望も小
 松殿の人心版降する感歎しひも君君とてはどのいふも臣以て
 臣とてはせんべいべうらば父父とてはとてども子以て子とてはせんべい
 べうらば君の為め忠あり父の為め孝ありと孔子の宣ふは遠に
 法皇後此由を宣ふ名今始ぬことこれ内府が心の中こそ辱し
 けは怨を恩を以て報しつると仰し困れ凍る臣あはれ君道な
 くとも天下を失む家も凍る子あはれ令名と失をばと云先言め相
 叶ひ上代ゆも末代ゆも又あるやれ大臣と

論者のより平家物語流布の本の周の幽王愛妃褒姒の生質



小松
重盛公
諸軍を
召き
圖

常々笑ふところ。烽火臺の火を揚げまは諸軍勢相圖と遠に
馳來く家の備しとあり褒姒とく始と笑す幽王是と
と家もちるは蜂火を奉らる諸侯の軍勢到着とれば更
み殺す。後こそ諸侯怒后実み殺あつと蜂火を揚は卒
も到む大戎とらるるえびと竟み周を亡せりと此事を揚と
書す。されは重盛公の不用みを召さるへすは法皇の御所を
固バかくのどと父入道を恐とめ法皇へ對し父の不忠ま
らんる。天下と家の為みせられし諸軍を欺み似と幽王の
兵を召さると同日の談みあは此時の後も最明寺時頼
諸國を巡れし佐野源左衛門常世と云浪士鎌倉の夏
あらん妻み口を取せ瘦馬み策と一番み弛泰らんとや

虚実を搜んと急めを召されし諸國の軍勢弛集りて
果しく常世其中み時頼感と三箇庄を領知と墨
附を洽りしとある。謡曲の作りのよりこれ論むる
足む

新大納言配野み卒去藤藏人謀め徳大寺殿昇進鬼界鳴め
康頼卒都婆を流す

去程み六月日新大納言成親卿を公卿の座み中。佐物進せけは胸
塞とけ着ををえ立ちらむ。預りの武士難波次郎經遠車を寄
疾とつけは。大納言心ちるも乘るみ哀れも。今一度小松殿
みまゝ度ゆは。たけ時を。重科めく遠國へ行も。譜代家子入二人
へみ副る。み打圍る。軍兵は。我方様の者絶くち。けは。涙み沈

其西の朱雀を南へ行へ大内山も今余所ふ又多ひたる都小残
 多北の方少き人々の心やと推量られ哀れ鳥羽殿をさるる内も此
 御所へ御幸ありゆ一度も出供めり色ざりしをとく我山左側渡殿
 とくありし孤も餘所ふとて通られけは鳥羽の南の門出て船屋
 一と急せざる近う副ありける武士を誰ぞと問ふへ預りの武士難
 波次郎経遠と名乗り若此辺に我方様の者やある一人尋く奔り
 せ舟小乗ぬ先云置て死とありと宣ふゆ経遠走り尋ねけ
 きた我こそ大納言殿の方と者一人も御所へ涙を流し我世
 在し時へ随ひ付たり者二千もあつらん今余所めては此の世を
 見送る者のあつるる悲しとて泣き一と猛き武夫たも道の袖を濡
 さら此御死罪を流罪に宥られし小松殿種とやさけけよ依り

其日摂津國大物の浦小着終不明る三日京より使使者とて聞
 ちるあゆめ失せりなと雪身へ備前の児嶋へ流まるとの使小
 松殿よりも此文ありゆゆも一と都近死片山里ゆもと色もつは吐
 ざりしをぬがゆ命をうりへ乞請し心易く思召しいと難波が
 許へ能く宣致せ相構と心公を差ふると仰越と旅の装細く沙汰
 贈らぬ新大納言へ厚く承うゆこれよりさは君ゆ離れ森せ
 佐の向も去がとゆ北の方少き人々も別を果しるる土地へ行
 工ぞ雲と道とつらるるのゆ再び故郷へ歸り妻子を相見えあも
 ぬと一と山門の跡松ゆく流されしも君惜せぬ西の七條より百
 飯さぬこれに是君の由禁ゆありむらるる艱難を経るを歸る期
 もぬとこそ今と首と列らるるをぞ増るるを涙の咽泣悲めども

うひぞちた。流石の露の令消るごと。跡の白波隔と六都へ次第遠
 ざり。日数累まば遠國既近づくと。備前の児鳴の漕寄民の家
 りせせぬ入なる嶋の習後山前海磯の松風波の音りれ哀れ増
 ける此卿のこめあはれ警らる輩より。近江中將入道蓮浄を佐
 渡國山城守基兼の伯耆國式部太輔正綱の播磨國宗判官信房を
 阿波國新平判官資行の美作國とやへる。折節入道相國福原の別
 業の座を係が。同月日根津左衛門盛澄を使者ゆく。門殿の許へ夫
 不預置一丹波少將を急ぎ是へ給ひ存る旨とやせされり。宰相
 さるる時。左も右もろりろせ。如何せん。ふらび物必せん悲しとよ
 とく。此の告れし少將泣く出立とる。北の方女房達猶も宰相
 の能ふやとせえりと歎くとれば宰相存る位のてら皆や。今世を捨ん

より外又何ぞとやせ死。何國の浦ゆもかきせ。我命のあらん限は訪ひ
 中登しと宣ひたる少將は今年ニッ成ぬ少死人のありしれ。日来々
 若き人ゆく。公達るこのとを細申ゆも坐ざりし。今この時ゆも成ぬ
 と流石懐し。少死者を今一度と宣ふぬ乳母抱くまアと
 少將膝の上置髪搔極涙を流し。哀れ七歳ふるが男
 成し君へ進せんとつひ。今なごひり。若不思議命生く成
 長く法師成て。我後世を吊へると宣ふ未だ知さぬ何ぞを
 別ゆべぬられ打顛頭ぬ少將を筆母上乳母の女房其座に在合
 人。心あるも意さるも皆袂を絞る。福原の使今夜鳥羽追出る
 登れし。少將いく程も延ざらん。今宵斗の都の内ゆく明きや
 と宣へども。いつゆと叶ふと頻ふや。其夜鳥羽へ下れけり

宰相餘りの物憂ふ。今度へ來も貝しぬらば。少將をうごせ乗る。同
 光二少將福原へ下り。是れ入道相國備中國の住人瀬尾太郎兼康
 小仰く。備中國へ流されり。兼康は宰相の管見を恐と緊し。當り中
 さ。道さうも。さうぐ痛て進せられ。少將へ慰め入る。夜昼
 唯佛名を唱へ偏父の工。祈られ。新大納言成親卿へ備前の兒
 鳴み座を。是へ舟着んと。備前備中の境庭瀬の郷吉備の中山
 有木の別所と云山寺。置と。少將の座を。備中瀬尾と。有木の別
 所の向。僅五十町。足ぬ。牙られ。少將め。其方の風も懐し。或時
 兼康を召く。是より大納言の言。さう。知への程。ある。と。向。直。小
 知せ。悪。り。ち。え。と。や。ひ。く。ん。片。道。十二。三日。いと。答。入。少。將。涙。と。そ。く。と。流。
 日本。昔。三。十三。ヶ。國。ゆ。く。あり。し。中。葉。六。十六。國。分。ら。れ。り。備。前。備。中。

備後も本一國ゆ。く。り。東。小。少。ゆ。出。羽。陸。奥。も。六。十六。郡。一。國。ゆ。く。十二。郡
 を。割。く。出。羽。國。を。立。ら。し。ぬ。され。実。方。中。將。真。忍。へ。流。され。時。陸。奥。の。阿。古
 屋。の。松。小。樹。隱。と。く。出。べ。月。の。出。も。や。ぬ。と。詠。古。歌。を。ひ。ひ。其。松。を
 見。んと。それ。代。ち。り。し。古。老。の。告。今。や。其。所。へ。割。と。く。出。羽。の。内。ふ。り。し
 と。出。羽。の。國。へ。越。く。阿。古。屋。の。松。を。入。り。し。や。筑。紫。より。都。後。赤
 の。使。の上。る。步。路。十五。日。の。定。入。汝。ダ。ヤ。と。く。す。ふ。十二。三日。行。る。殆。鎮。西。へ
 下。り。る。備。前。中。後。の。向。の。兩。言。ゆ。へ。と。と。遠。く。中。父。の。所。渡。下。り。西。処
 也。成。短。知。せ。し。く。の。と。ち。り。め。と。其。後。へ。恋。し。く。と。も。向。の。板。又。法
 勝。寺。の。執。行。俊。寛。僧。都。平。判。官。康。頼。外。丹。波。少。將。成。短。知。備。中。國。の
 配。所。を。香。以上。三人。薩。摩。方。鬼。界。が。鳴。へ。流。され。是。は。彼。路。遠。凌。つ。て
 行。所。中。へ。人。稀。也。船。の。通。ひ。も。す。適。人。の。是。也。衣。裳。な。れ。人。ゆ。も。似。に

言詞ハ知れど身ハ毛生色黒く牛のど一男ハ烏帽子も着は
 女ハ髪も下は結も食も物もなれば唯殺生を業とし賤ヶ山田を返
 高き山あり鎮火燃る硫黄充滿れば硫黄が鳴た名付る雷鳴
 上り鳴降麓ハ雨をげ一日片時人の命を保つて死に術もな新大
 納言ハ少甘くもどれもどれ程も座とどれ子息丹波
 少將成経共二人男界へ流されぬと今ハいらをう期を死とて出家の
 願便付る小松殿へ中され法皇伺免あり栄花の袂引斐と
 浮世を餘す墨漆の袖も窈一ひるまを大納言の地の方を
 都の北山忍びし住別ぬぬ物の物うぬ彼も是も忍ぶれり色
 行月日も暮一かひも女房もまう一或ハ世と忍入目を裏と

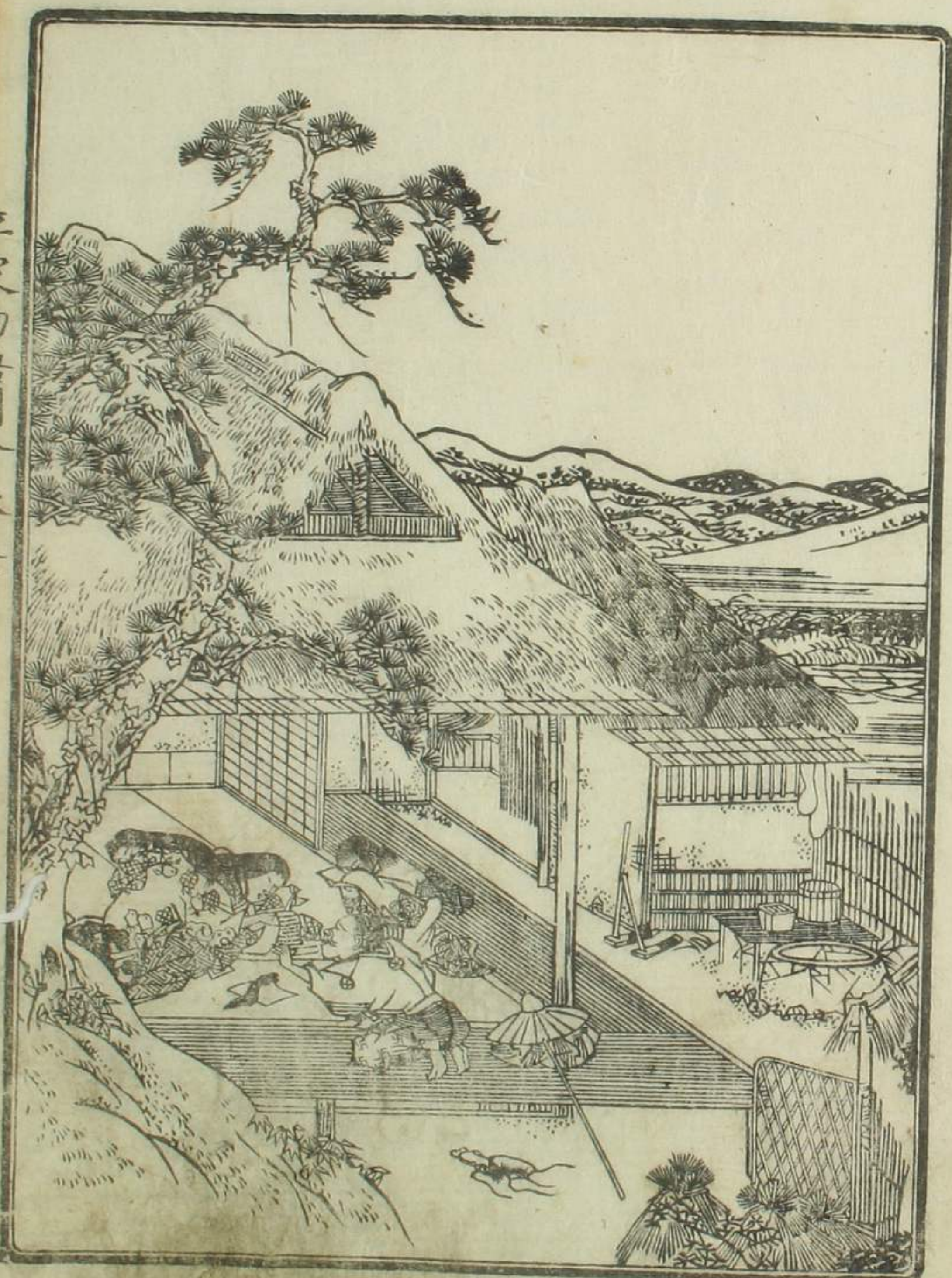
問訪人者も中源左衛門信俊と云侍情あり常と訪ひまを
 或時北の方信俊を召城や殿中へ依前の見鳴みせし今ハ木別
 所と名心座とやいふも一墓を筆のぬをも進せし返りをも今
 一ひ見たりと多どもよまうと宣信俊涙と浮某幼少より憐
 在蒙片時ちびるも声耳も忘とて中園へ下りの供願
 一六波羅殿也取上もや。てひのるうらめみ逢いた文経りまや
 いんと申ける北の方斜ちも悦び頻とを怒渡され若君姫君前ハ
 比多あり信俊集く懐中へ違と依前国木木の別所へ尋下り
 の武士難波経遠が方へ云入けと其志を感し也見まを免し大納言へ
 道ハ唯今も都のことと云か歎き沈せし處へ信俊が糸と結其六
 誤と起揚りつる夢も現も是へくと申され信俊側近も

此の様に伺ふゆゑ栖居所の物憂はさるゝ墨染の袖を穿る目もくも
 心も消果涙の滴を壅難う。北の方仰の次第濃小語中も取去りたる
 用と見えぬ水堂の跡と涙の書と。そこそとていふにねども少人
 餘り小恋悲とるふる。我身も尽ぬ襟小堪忍べくもあらずと書
 じこれバ日来の恋し事の数もいと多かる。かくく四五日
 信俊あはれめ。取期の中もさるをも。んせん中々。取
 預りの武士其美へけふと中納言哉不とも延びん唯疾帰
 色と宜ひく。我を近う失たれんと覺る。此世ふたれと世バ後世も
 吊ひてと宜ひく。也返る夕終りければ。信俊又こそ多かるのめと。暇
 中く去つと。汝が又來ん度を待た下とも。えぬ。餘り名残惜れ
 暫くと宜ひく。度と呼ぶ戻されぬ。さくも在る。たな。ね。信

俊へ涙と押へ都へ歸り上り。北の方へ泰也返事を。用くも。へ。さ
 之をもへと覺く。ゆゑの奥の髪の一房あり。二目た。紀
 念も。今中く仇されと引被て。臥る。若君姫君も声も喚叫び
 らひ。去り。同八月十九日中山五木の別所。終り失ひ。最
 期。の。始。酒。毒。を。交。進。せ。が。叶。ざ。ら。ぬ。二。文。餘。り。の
 岸の下。鐵蒺藜を植て。突後。其。貫。つ。そ。失。れ。る。無
 下。方。之。北。方。此。傳。傳。ひ。つ。も。今。度。見。り。は。な
 と。ひ。と。今。日。も。安。も。音。さ。り。今。何。さ。せ。と。菩。提。院
 と。云。寺。も。尼。ふ。る。佛。事。作。善。の。營。他。事。ら。り。此。北。方。山
 城。守。敦。方。の。女。後。白。河。法。皇。の。心。人。双。美。人。ら。り。大。納。言。の
 かく。寵。愛。の。人。也。下。り。若。君。姫。君。と。折。阿。彌。父。の

後世を吊ひゆるぞ哀なる眼前天人の五衰を異るるに爰に徳大寺
 大納言実定卿へ平家の次男宗盛卿を大将を越と替く世のさふと
 も又んとく大納言と辞し。菴居しくあつゝも今いふ家せると仰
 けり。御内の上下皆歎き悲しく中藤藏人丈夫重兼と云道夫
 の諸事お心ゆる者めく或夜月を弄嘘かえとる処糸道君あはれ出
 家の召いよし。左いで上下の内迷者と成いん今平家の体をもま
 嫡子重盛公次男宗盛卿左右の大将を免く三男知盛嫡孫維盛と次
 弟小をれば他家の人へのつ大將に當つぐればそれゆつれ珍しき旨と案
 かん安藝の嚴島へ平家崇敬浅くは是へ松菴菴乃く免しく角
 之との術濃み治りたれば徳大寺殿の横子を打とはが工夫曾て
 うづりたると能く納めし俄に精進を始め嚴島松菴菴のりける優

舞姫を多く立せし。抑當社に我ホが主の平家の公達こそはあり
 けり。宗徒の内侍十餘人夜昼付副さるる。款待する
 さく内侍は何夏の心祈禱やんと守りたれば大將を人ぬ越とく其初の
 為と宣り。二十日松菴の洞神樂を奏し。風俗催馬樂歌を其間舞
 樂も三度迫りたり。山下向の時宗徒の内侍十餘人船推立一日路送る
 徳大寺殿餘り名残をいま今日路。今日路と宣ひて。都や多く召具さ
 せし。徳大寺殿の亭へ入るる。数々の引出物
 賜り歸されり。内侍は遠く是近上りつる争う我ホが主の平家系
 らどるべからし。西八條殿へまゝ入道殿中々對面し。ひ内侍は唯今
 何事の列参ぞと宣ひ。徳大寺殿の嚴島へ松菴菴也へ我く船を仕立
 一日路送り。暇とせし。徳大寺殿名残借とく。今日今日と



源左衛門信俊
 大納言入道の
 御返事を
 北の方へ
 奉る圖

正家物語
 源氏物語
 卷之三

正家物語
 源氏物語
 卷之三

九

仰らまはつひし是道召具てれい京へゆく當家とよそへ飯るべしと
かく糸トつりとや。入道殿重ねて其徳大寺へ何るの祈誓言ふ恭詣あり
つるもさへい大將を入ふ超らま其祈のものと仰れいひ紀と其時入道殿打
點頭王城ふさも灵社灵佛多く座をきり置浄海が崇めア嚴
島へ遙く来りてこの最愛さ。それ迫切らるるも。嫡子重盛公
内大臣左大將ゆへ座をを辞させ次男宗盛卿大納言右大將と超
さるく徳大寺殿を左大將ふりささるる。あつる賢さ討ひぬ皆是
実定卿の忠臣藤藏人大丈夫重兼。主人を以て方寸ゆり。徳大寺殿重
兼を重く賞し多り新大納言かくもけらるる。謀叛を企其身は流され
く七び子息ゆ鬼眾鳴の辛苦をうけし。是非なれ又法皇ハ
三井寺の公頭僧正を師範とし。真言の秘法大日經金剛頂經蘇悉

地經の秘經を受させし。九月三井寺まへに灌頂ありとや。山門の大衆
大に憤り昔より受戒の當山に遂させし。先規ある。今三井寺に遂
せし。當山を焼拂んと沙汰ともあり。法皇に加行斗に結願あり。灌頂ハ
思召當り。さきども公頭僧正を召具し天王寺へ幸ひ。五智光院を
建亀井の水を五瓶の智水と定め。佛法最初の灵地と傳法灌頂の
由本意を遂させし。山門の騒動を静むる。三井寺まへに灌頂あり
し。山門の堂衆。學生齊後の童法師。成。學生不快のる出来合戦度。及
諸國の強盗山賊海賊。本堂衆も合躰。大合戦と成故。山門。公家
聞。武家は觸訴るも。入道相國院宣を承。紀伊國の住人湯浅權守
宗重。畿内の兵二千餘人。大衆も添。堂衆を攻。れども。幾度も官軍
敗軍せり。其後山門荒る。止住の僧侶希。なる。十二禪衆の。これ

行法退轉一修学の窓を四教五時の春の花も匂ぞ三諦即是の秋
 の月も陰より三百餘歳の法燈を挑る人もろく六時不辨の香の煙も絶る
 ぞ一堂舎高く聳三重の構を青模の内も挿棟梁遙き秀く四面の
 椽を白露の間に掛りしを今も供佛を嶺の嵐に任せ金容と紅瀝に濡
 し夜の月檐の間に洩る燈を挑げ曉の露蓮座に珠を垂未世の
 例もありや遠く天竺の佛跡と吊る昔佛の法と説きし竹林精舎孤独
 園も日來の孤狼野干の栖と成り礎の残り白鷺池の水絶く葦菼蕃の
 梵下衆率都婆も傾く葦茂ね震且ゆも天台山五臺山白馬寺 玉泉寺
 も今住侶もろく荒果大小衆の法門も箱の底ゆ朽ぬべし我朝も南
 都の七丈寺荒果八宗九宗も兼学も名けしそ免愛宕高雄も昔の
 堂塔軒を双べし一夜の中も荒く天狗の栖と成ぬればをゆ

ゆも止ごとく貴き天台の佛法も治業の今も及ど亡果ん時
 一と歎きし何者離山せし僧坊の柱ゆ一首の歌を書付し
 昔傳教大師當山草創の時阿耨羅三藐三菩提の佛達祈伽
 藍落慶の上我立仙とやされし今も巖山の二松のどし彼是必ゆ詠
 するふそいと優しけれ八日へ藥師の目され南無と唱る声もせは卯月の
 垂跡の月られた幣帛捧る人もろく朱の玉籬神久し注連繩のそぞ残
 ける其比信及善光寺炎上せり此如来へ中天竺舍衛國月共長者窟淨
 檀金を得て佛目蓮長者心をすく鑄顯し久し一標も半の弥陀
 の三尊三國多双の天像を佛滅度の後天竺止す入と五百餘歳
 佛法東漸の理ゆ百済國小程一千歳の後彼國齋明王我朝欽明

天皇の御宇日本不渡さ難波の堀江に星霜を經ね信列水内郡
み移りし五六十餘歳されども炎上の髪を初とて去後不鬼
界が嶋の流人露の命草葉が末ふれり丹波少將の舅平宰相
教盛の領地肥前國鹿瀬の庄より常衣食を送られし也俊寛康
頼より命生くるに中ゆを康頼も流されし時周防の室積めて
出家に法名性照と付り出家を元來をりけしはかくあそひ
つげたる

冷くかくそむれをく世の中そ捨ざりしを悔し
丹波少將と康頼入道へ熊野信仰の人ゆくゆゆゆゆ此嶋の内は熊
野三行我劫請し帰洛を祈らんと似る所ゆと求る或は林塘の妙
なる紅錦繡の粧品も或は雲嶺の恠あり碧羅綾の色もあは

山の氣色樹立のさるを他は勝南へ漫く洋海雲煙の浪深く北々
峨々山岳百尺の瀑布漲落松風の音寂寞とく飛龍權現の在
那智の山は髪髻これば是を仮名付く此嶺へ新宮彼嶽へ本宮
其佗何の王子某の王子と名をす二人毎日熊野若の真似し伏辺
の水を垢離ふてて岩田河の清き流と多し高きふ上て心門と秘ト
ける或夜兩人通夜する夢ゆ仲より来る風木木の葉二兩人が
袂に吹く身を取くれば熊野の梅の葉二葉をの一首の歌
を蟲をみり

ふもやゆる神のいのりのまがれはるるかへ飯らざるべ
康頼入道餘り故郷の恋ゆせめての謀名千本の卒都婆を造り
阿字の梵字年号月日仮名実名二首の歌をて書付たる

薩戸へは澳の小島に我ありと親ゆつげや八重の夕風
 多ひ中をるる一とりの旅も後古里へ恋しぬの成
 是を浦小持出南無飯命頂礼梵天帝釈四大天王堅牢地神王
 城の鎮守諸大明神別々へ熊野大権現安藝の嚴鳴大明神せ
 めく一本をりとも都へ傳へ賜と沖の白波の寄て飯を度と卒都
 婆一本が海に浮へたる卒都婆へ送りぬ流る海に流るる日
 数つれば其数も積り物多し心や便の風とも成るるえ又神明佛
 陀の送せぬ一や牛本の内本藝刻嚴鳴神前の渚へ打上るるふ
 康頼入道が河縁あり僧り然るる便もあふ彼鳴小渡り其
 行衛も尋んと西國修行の出入るるが先嚴鳴へ糸心静法施しく
 立かんとするが満る朝に沖よりそこそこをく打寄る藻屑の

中ひ卒都婆の形えたる何心も取これ歌も姓名も彫入刻付
 くれ波ゆも洗えれぬ鮮明もえたり殆不以議のとく及の傷み差
 と都へ帰上り康頼が老母尼公妻子たの條の北紫野の忍びの
 ぬ是をまきけきバこびへ其そつたる女悦び此卒都婆高麗唐土の
 方へも流とせむく是近傳へ今更物と思さると悲しむるる道
 庵聞ふ及く法皇殿覽ありあふ無慚の者たが命未ご生てあふ
 ぞこの涙を流させぬみぞ添き是を小松大臣の并へせりく父の禅門
 小つせせむる柿本入丸へ鳴かると行ねを山辺赤入へ蓋邊の田鶴と
 詠多し住吉の明神の片削の多ひとろ三輪明神の杖立る門をさる昔素
 盞鳴尊三十一字の和歌を讀始多ひくり以來諸の神明佛陀も彼妹
 吟を以て百千萬端の多ひを述多入道殿も岩木さるる流石哀けふ

宣ひたる入道殿かく憐む上へ京中の上下若鬼界が鳴の流人の歌よ
 とく口をこまぬへちりたり。千本追作りおける平都婆ちればこそ少
 さうもあけめ薩摩方より多くと都まて傳りたる不思議さ。古漢至胡
 之攻らんと時大將軍李少卿を以て討めたる。三万騎の大軍を帥られ戦
 ちけ。李將軍胡少卿一放再び獲武ぬ五万騎を以て討む。是も胡少
 生捕とあり。胡降泰を勸む。更み肯はよる。六千餘人の生捕を片足ぐ
 別と追放れ。多く胡地ぬ死せ。分獲武入へ死せ。木の実落穂を拾と十
 九年の艱難を経られた。足へ文を附と放せ。漢朝ぬ達。竟節を
 全へ。故郷ぬ飯りと云り。是二筆のまき。見へ二首のよみ歌。彼へ上代是
 末代胡國鬼界境を隔て。世こそ替と風情も同。難く。一次第え

平家物語圖會卷之二終

